

3. BPSD の緩和を目指した認知症ケアの実践

介護老人保健施設 ベルアルト
介護福祉士 高田英利（たかだ ひでとし）

【はじめに】

認知症の進行によって BPSD が現れている利用者に対し、その背景を適切に把握することが重要である。今回はセンター方式の B2 シートと D4 シートを活用し、ケア内容を検討、実施した事例を報告する。

【事例紹介】

90 歳代 女性 既往歴：アルツハイマー型認知症。右大腿骨大転子部骨折
認知症自立度：Ⅱb 日常生活自立度：B 1

入所後より強い帰宅欲求があり帰宅できない事情を伝える。しかし記憶力の低下から理解や判断が難しく、繰り返し同様の訴えが続く。帰れない事で不安や不信感も募ってきており、離設未遂も見られるようになった。

【倫理的配慮】

対象者の選定と事例発表にあたり、事前に本人と家族に承諾を得た。

【方法】

1. センター方式の B2 シートと D4 シートを用いてアセスメントを行う。
2. アセスメントの結果からケア内容を検討し、実施する。
3. D4 シートを用いて、ケア実施前後の行動比較を行う。

【結果】

アセスメントを行った結果、B2 シートからは慣れ親しんだ生活が出来ていない事がわかった。D4 シートからは施設生活の意味・目的の喪失や軽薄な人的環境からくる不安や不満がある事がわかった。その結果を踏まえて、コミュニケーションを通じた人的環境の改善や、生活背景に沿った内容のアクティビティを提供し、余暇時間の充実を図るケアを検討、実施する。

D4 シートで前後比較をした結果、実施前では、帰りたい発言数 10 回、宿泊を受け入れた発言数 1 回だったが実施中では、帰りたい発言数 9 回、宿泊を受け入れた発言数 3 回と微小ながら変化がみられた。また、手工芸作成に関わる事で情動的な影響がみられ、明るい表情で過ごす時間が増えた。以前は詰所の職員に話しかけていたが、ユニットの見知った職員に話しかける姿が増えた。

【考察・まとめ】

帰宅願望がなくならなかったが、背景のアセスメントだけでなく、多角的なアセスメントが必要であり、不十分だった。しかし、作業中に関しては帰宅願望がなかったのは、好きな事を実施することで気が紛れていたのではないかと考える。また、表情や職員に対しての変化があったことは、その人の背景を知り、その人に沿ったケアを検討実施した事で心理的ニーズを満たすことに繋がったからだと思われる。

今後は利用者の立場に立って一緒に考えながら多角的にアセスメントできるよう努めたい。